△ドン底の歌

金持には金持らしい歌があり、学生には学生らしい歌があるやうに、貧民にはまた貧民らしい歌がある。お天気次第で浮沈する土方社会には、情緒纏綿たる歌がない代り雨天を呪ふ歌がある。降る雨御を眺め乍らっチエッ、今日もアブレかしと呟く土方の姿が歌の中にも髣髴として見える。『エ方殺すにゃ刀はいらぬ、雨の三日も降れば よい』又紡績女工の仲間の歌の中には、人でなしの監督や事務員に対する呪詛の声を聞く事が出来る。『おのれ見て居れ此門出たら、酒し手ボ血で染める』貞操なんぞといふ事を民ども思つてゐない貧家の女達には聞くに耐えない淫猥な歌が唄はれて居る。野合、姦通に関する歌が数へきれないほど沢山ある中にも『霜枯三月はおまへの女房、花の三月けつくらへ』『夜明け』―村島帰之『ドン底生活』(47)より

―○男らしさと哀れっぽさ―

テレビの話にこんなこともある。東京のTBSで「放送上さけたい言葉」という一覧表を作って、たとえば「お巡り」は警察官と呼び、「くすや」は廃品回収業と呼ぶというような、言いかえのモデルみたいなものを出している。そのなかに、「土方」とか「人夫」とかはやめて労務者と呼ぶべきだとあるのだが、これはどうだろうか。

おれたちがこの雑誌をあえて『労務者渡世』と名付けたのは、TBSの出してる言いかえとはまるで違う気持からなので、それは長くなるから今は言わないが、気持として、TBSの労務者よりは、土方のほうがマシだとは思う。土方のほうがきっぱりと男らしく、TBSの労務者は何か哀れっぽい。そしておれたちは、哀れっぽさやみじめったらしさを棄てたあたらしい労務者が、肩を張って、どーんとこいとばかりに世を押し渡るために、あえて『労務者渡世』と名乗ったのだ。